

フーツとカーツ

フーツとカーツ、龍村仁と星野道夫。

ガイアシンフォニーの出演者で、既に他界している人たちが何人かいる。最初の映画が出来てから既に四半世紀が経過しているので、当然と言えば当然なのだが。

数多くのガイアシンフォニーの出演者の中で、しかし、映画の作製前に既に他界していたのは星野道夫だけである。実は、カーレーサーのF1チャンピオン、アイルトン・セナはガイアシンフォニー第二番の出演予定者であった。が、撮影に入る直前に彼はレース中の事故で逝ってしまった。従って、龍村はアイルトン・セナを撮ることができなかった。その時龍村は、「撮れないセナを撮る道はないのか」と迷い苦しんだ末に漸く諦めている。まったく同じことが星野道夫に起こった。しかし龍村は、この時、他界して既にこの世にいない星野道夫をガイアシンフォニー第三番の主要な出演者と定めたのである。龍村仁と星野道夫。後述するが、彼らは遠い昔、神話の世界で兄弟だったのだ。この神話上の兄弟への想いの中に、

龍村仁という人間の本質を垣間見ることが出来る。ここでは、龍村が星野道夫と共に歩んだガイアシンフォニー第三番という「旅」の軌跡を追ってみたい。

龍村と星野は、星野が他界する2週間ほど前に新宿御苑の森を散策しながら話している。

ぼくたちの中に眠っている一万年前の記憶が甦ってくるような映画にしたいね。

人間には、いつの時代にも神話が必要なんだと思う。二十一世紀にふさわしいぼくたちの時代の神話を命がけで築かなければならない、と思っているんだ。

『ガイアシンフォニー
地球交響曲第三番 魂の旅』20頁

この映画で、龍村と星野は現代の神話を創りたいと願った。では、龍村や星野が求めた神話とは何か。それに関しては、改めて書くことにする。

星野道夫が死んでしまった。つまり、龍村にとって映画『地球交響曲第三番』という大きな仕事のアウトラインが出来上がり、さあこれから「という時に、その計画の根幹が崩れ去った。それ以上に、星野道夫という大切な大切な存在を失った。その衝撃たるや、いかなるも

のか。正に「青天の霹靂」としか言いようのないこの事態に対して、当然ながら龍村の思考は散り散りに乱れる。星野道夫の死と共に『地球交響曲』という映画そのものが、ここで「死ぬ」ということなのか。」とまで書いてある。しかし龍村仁という人間は、このような進退窮まった時、身体力を抜き思考を緩め、その状況に身を委ねてしまうのだ。その時の心の様子を次のように書いてある。

もしその道が、本当に求められている道なら、喜んでその道を選ぼう。(中略)この先どうなっていくのか、などということをお願い煩うことすらおこがましい。ただ、なにかがやってきた時、そのやってきたことの意味をできるだけ正しく理解し、素直に対処すればよい。その結果は、私自身の想いや力を遥かに超えたなにかの意志なのだろうから、心配することも怖れることもない。

『地球交響曲第三番 魂の旅』22頁

こんな事態を前にして、「心配することも怖れることもない」という思考。これは既に書いていたが、子供の頃激流の川に飲み込まれた時の身の処し方に近い。全身の力が抜けたとき、

予期せぬ道が拓ける。眼下には、風もないのに新宿御苑の黒い森がうねっている。その様子を見て静かに涙しながら、しかし龍村の心には次のような感覚が生まれていた。

「星野道夫は生きている」という体感が、からだの奥から渾々と湧き続けていた。

『地球交響曲第三番 魂の旅』22頁

ところで星野道夫の死亡事故に関して、当時新聞はじめいくつかのメディアにある種の論評が流れた。それは、自然を甘く見た慢心の写真家が周りの注意を聞かないで、銃も持たず一人野営した結果クマに襲われてしまった、という趣旨の意見である。しかし龍村の見方は全く違う。龍村は星野の事故を次のように分析した。

「熊」は彼にとって、自分を生かしている地球ガイアの大きいなる生命のシンボルだったのだ。「熊」すなわち、「地球の大きいなる生命」への畏怖いぶを忘れないために、彼は銃を持たなかった。銃を持つだけで自分が強くなったと錯覚し、鈍感になってゆくことを嫌った。避難小屋に泊まって自分の生命の安全を保障されながら、その少し濁った目で「熊」を見ることを潔

しとしなかつた。だから、熊の危険が身近に迫っていることを知りながら、ギリギリの選択として、野外テントに泊まり続けていた。そして、フト気付いた時にはすでに巨大な熊に抱かれてしまっていたのだ。

『地球交響曲第三番 魂の旅』 29頁

そして、以下のように結論付ける。

深夜、熊のいる森で、銃も持たずたったひとりで野外テントで眠ること、それは他者がどう批評しようと、星野自身はつきりと自分の意志で選びとっていた生き方だった。そこには、星野道夫を「星野道夫」たらしめた痛ましいまでに誠実な生き方がある。

『地球交響曲第三番 魂の旅』 26頁

全くもってこの通りだと僕も思う。星野道夫が自然と向き合う時に見せた、命の危険すら顧みない愚直なまでの誠実さ。愛おしくなるほどの誠実さ。僕たちの胸を打つあの写真と文章は、星野の魂がもつこの「誠実さ」がもたらすのだ。一方、星野自身は銃を持たないで

動することや、原野にいる熊への想いを次のように述べている。

いつか、ライフルを持って長期の撮影にはいったことがある。じつに安心だった。けれども、どこかで自分の行動がとも大胆になっていったような気がする。最終的には銃で自分を守れるという気持ちだが、自然の生活の中でいろいろなことを忘れさせていた。不安、恐れ、謙虚さ、そして自然に対する畏怖のようなものだ。

『アラスカ 光と風』(星野道夫著作集 1) 124頁)

「どこか近くに熊がいて、いつか自分が殺られるかも知れない、と感じながら行動している時の、あの、全身の神経が張りつめ、敏感になり切っている感覚がボクは好きです。あるインディアンの友人が言っていたんだけど、人類が生き延びてゆくために最も大切なのは「^{フイア}畏れ」だって。ボクもそう思います。我々人類が自然の営みに対する「畏れ」を失った時滅びてゆくんだと思うんです。今ボクたちは、その最後の期末試験を受けているような気がするんです」

『地球交響曲第三番 魂の旅』25頁

星野は自身の命を賭してまで、我々現代人に警鐘を鳴らしている。このことを伝えたかったのだ。自然の営みに対する「畏れ」を失くしてはいけない、と。それを失くした人類に未来は無い、と。そして龍村も同じ思いを共有している。だからこそ身体の無い星野道夫を、敢えてこの映画で撮っているのだ。

この星野道夫の事故の真相に関しては、小坂洋右・大山卓悠著『星野道夫 永遠のまなざし』に詳しく記されている。その内容を簡単に言えば、一部でささやかれたような夜営をした星野道夫の無謀とも取れる樂觀的態度がこの事故を招いた、という理解は間違いだということである。星野を襲った熊は人間のエゴで餌付けされてしまった結果、「人Ⅱ餌」という学習が成立し、人間との適度な距離感を失った特殊な個体だったのだ。つまり、星野道夫を襲ったのは、人を襲うことが半ば常態化した通常ではあり得ない熊だった。もちろん星野はそんな事情を知らずに、これまでの野生の常識で接した。それに加え、宿泊場所とされた小屋がスタッフ全員を収容するにはとても狭く、星野にはスタッフに対する遠慮もあっただろうし、野外のテントの方が快適だった。更に、この年は熊の主要な餌であるサケの遡上がかなり遅れ、この時期に十分なサケが捕れなかった。このように様々な要因が悪い方向に重なってし

まった結果、この悲劇がもたらされたというのが事の真相だったのである。

しかし龍村も同じことを書いているが、僕も思う。これらの記事を書いた記者たちは、星野の写真を見たことも無ければ、著作を読んだことも無かったのではないか、と。星野道夫の作品に触れたことがある人ならば、少なくとも彼が自然を甘く見下したり、自然を前に無謀な振る舞いをするなど決して無い、という事は容易に想像がつくはずなのだ。銃を持たなかったのは、自然の中で写真を撮る以上、自然と対等な立場に立とうとした星野道夫の持つ矜持であった。

先に書いたように、龍村仁と星野道夫はアラスカ先住民の神話の世界において兄弟だった。名前はフーツとカート。龍村と星野がみせる魂の共鳴は、肉体のレベルを超えて、この神話の世界での結びつきがもたらすものなのだろう。星野道夫は生前、アラスカ、ケチカンに住むクリンギット・インディアンで熊を克蘭（家系）にもつ一族の長老エスター・シエイを訪ねている。自身が晩年追い求めていた「ワタリガラスの神話のルート」に関連した取材だったと思われる。そこで星野は、自身の魂が「熊の一族の神話上の存在」であることを告げられていたのだ。その経緯は、龍村がエスター・シエイを訪ねた時に全く予期せず知らされた。次のように書いている。

「ジン、私たちはあなたに伝えなければならぬことがあります。ミチオが初めて訪ねて来た日、私たちは一目で彼が、重要な使命を帯びた熊の一族の一員であることを確信しました。『創造主』^{クリエイター}に尋ねたところ、ミチオは熊の一族の神話上のとても重要な人物であることがわかったのです。その人物の名は『カーツ』といいます。私たちはある儀式を行い、彼に『カーツ』という名を授けたのです」

『地球交響曲第三番 魂の旅』92頁

そして、あろうことか龍村自身も次のように言われたのだ。

「ジン、私たちはあなたにもミチオと同じ儀式をしなければなりません。あなたはそのため今日ここに来ているのです」

『地球交響曲第三番 魂の旅』93頁

その時の気持ちを書き、龍村は以下のように書いている。

一瞬、なにをいわれているのかよくわからなかった。普段なら「なぜ私が?」「どんな儀式?」「なんのために?」といった疑問が次々に湧き起こって来ただろう。ところが、そんな疑問が湧き起こってくる以前に、なにか圧倒的な力が私の中を通り過ぎて行った。「私はその儀式を受けなければならない」とごく素直に思った。力みも不安もなくそう思った。

『地球交響曲第三番 魂の旅』93頁

その儀式の間中、決して目を開いてはならないと龍村は命ぜられた。しかし龍村はその儀式の様子を見た。龍村は目を閉じたまま、「音で見た」と言っている。そう。人間に備わった五感は何かが欠けた時には別の何かが代替する。龍村にとって、音は光と同等の力を持つてこの儀式の情報を伝えた。この「音で状況を見る能力」は、本来誰しも持っている力なのだろう。そもそも僕たちは音を耳で聴くと思っているが、実は音のもつ振動は全身で感じている。だから、その音の波を耳以外で聴くことは可能なのだ。しかし日常に不要なこの力を、今ではみな忘れてしまっている。そして星野道夫も、龍村と同様この能力を忘れていない人

間の一人だった。龍村は、星野道夫のこの能力について次のように書いている。

深夜、森の中にテントを張り、近くに熊の気配を感じながら、かすかな風の音や森の声に耳を澄ましている時、いのちの深奥から湧き起こってくる怖れと共に、全身体の感覚が異様に研ぎ澄まされてゆく。その研ぎ澄まされた感覚こそが、目に見えない世界を見る力なのだ。

『地球交響曲第三番 魂の旅』94頁

余談になるが龍村仁という人間は、「音」に対して、並外れた鋭敏な感性を持っているように思えてならない。ガイアシンフォニーという映画では、音がとても重要な要素を占める。この映画で、音は映像の補助的な役割を果たすのではなく、音そのものが直接我々の五感に共振し、ある種のイメージをもたらす。いやイメージというよりも、「実体」といった方が正しいかも知れない。音そのものが、そこにある龍村の意志を伝えてくれるのだ、と僕は思う。映画のタイトルが「交響曲^{シンフォニー}」とあるのも、音の、あるいは音楽の重要性を示唆している。突然、儀式の音が止んだ。その時、まだ目を閉じたままの龍村には、辺りに渦巻いていた

エネルギーが護摩の煙のように立ち昇り、ゆつくりと天空に消えて行く様子が見えたという。それは、青い静寂の中のできごとだった。目を開けるように言われ、龍村は次のように告げられた。

「あなたに『フーツ』という名を授けます。あなたは今日から熊の一族の兄弟です」

『地球交響曲第三番 魂の旅』96頁

こうして星野道夫と龍村仁は神話上の兄弟になった。いや兄弟になったというよりも、かつて二人は神話の世界で兄弟だったのだ。因みに神話上でカーツという存在は、熊と結婚した美しい人間の娘が産み落とした3人の男の子の内の一人だった。そして、この子の父親すなわち娘の夫であった熊は、熊の社会と人間の社会が上手く共存できるように、自らの命を人間社会に捧げた存在であった。星野道夫は、人間が自然と調和を保って存在することを願っていた。そして熊に命を捧げた。人間社会と大自然が調和を保つため、今度は人間の側の代表として、星野道夫が神話の中での父親と同じ役割を果たしたように思えてならない。では龍村の魂、フーツはどのような存在だったのだろうか。それは分からない。おそらく、この

母親が生んだ男の子の内の一人だったのだろう。龍村は書いている。

フーツとは誰なのか、その名をなぜ私が授かるのか、その名を持つ者にどんな使命や役割があるのか、を尋ねたかった。しかし尋ねることができなかつた。

『地球交響曲第三番 魂の旅』96頁

神聖な儀式の直後、好奇心丸出しの態度でものを聞くことが、真剣に儀式を執り行つてくれた熊の一族の人々の心を冒瀆するように思えた、と龍村は言っている。そして何よりも、同じ儀式を誠実に受けたであろう星野道夫の魂を汚すような気がして、尋ねることができなかつた、と書いている。一方、星野道夫はこの事実をどこにも書いていない。彼がもつ先住民の神話に対する畏敬の念が、これを軽々に公表することを許さなかつたのだ。龍村がフーツの役割を問えなかつたのと同様、熊の一族に対する深い敬意が、それをさせなかつたのだと思う。いずれにしても、先住民が一族以外の者に神話上の重要人物の名前を授けるといふのは極めて異例の事である。この熊の一族は、遠い異国からやってきた龍村と星野に、自分たちの神話が現代社会で“生かされること”を託したのだ。今生での彼らにその役割があ

ることを、一族の長老は見抜いたのである。だからこそ龍村と星野は、我々の中に眠っている1万年前の記憶、すなわち縄文の記憶を蘇らせるための神話を、命がけで創ろうとしたのだろう。映画ガイアシンフォニーを観ていて脈絡もなく涙がこぼれたり、懐かしさが込み上げたりするのは、もしかしたら僕たちの潜在意識に眠る縄文の記憶の片鱗を垣間見るからなのかも知れない。因みに、魂となった星野道夫は向こうの世界に移行する前にエスター・シェイを訪ねている。エスターは、龍村にこんなエピソードを語っているのだ。

「八月八日の深夜、ミチオが訪ねて来た。入口のドアのところに立ったままいるので、中に入るようにいったが、なにもいわず、そのまま去っていった。その時、ミチオの身になにかが起こったことを知った。そして、翌朝の新聞で彼の死を知った」

『地球交響曲第三番 魂の旅』83頁

エスターの言う8月8日は、星野道夫が逝った日であった。自然に対する畏怖の念、目に見えない存在の価値、情報化時代における想像力の重要性、現代における神話の必要性。魂の兄弟という存在の故なのか、龍村と星野の価値観や思考の共通点は数多い。これらの視点

は、現代を生きる我々がともすると忘れがちで、とても静かな想いではあるが、しかし世界の調和を考えると、きにとても重要な想いである。因みにガイアシンフォニー第三番の冒頭のシーンには、「亡き星野道夫に捧ぐ」というタイトルが入る。龍村の星野道夫への深い想いが表れる。

龍村は著書の中で、『ガイアシンフォニー第三番』はいまだに完成していないと書いている。つまりこの星野道夫と龍村仁の旅は、星野が逝って20年以上の歳月が流れた現在、なおもその途上なのか。現代に神話を求める二人の旅は続いているのか。それは取りも直さず、龍村がガイアシンフォニーという映画を創り続けるという意味なのかも知れない。